



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学総合博物館ニュース
Author(s)	阿部, 剛史; 山田, 久恵
Citation	北海道大学総合博物館ニュース, 48
Issue Date	2024-06-21
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95635
Type	book
File Information	MuseumNews_48.pdf





©Royal Tyrrell Museum of Palaeontology

シチペスの幼体を捕食する ゴルゴサウルスの幼体

CONTENTS

- 01 資料部研究報告
- 03 プレスリリース
- 07 怪物ヒグマ OSO18の顛末展
- 09 卒論ポスター発表会
- 11 2023年度旧札幌農学校第2農場のガイド付きツアー

資料部研究報告

目梨泊遺跡の 発掘調査報告書 刊行について

天野哲也

(考古ボランティア)



目梨泊遺跡からみた冬の神威岬(高畠孝宗氏提供)

宗谷岬の南東約80km枝幸町、神威岬に抱かれるように海拔20m余りの切り立った海岸段丘上に目梨泊遺跡は位置します(写真)。このオホーツク文化の遺跡は1967年から1974年にかけて大井晴男助教授の指導のもと北海道大学文学部附属北方文化研究施設によって発掘調査がおこなわれました。発掘調査は仮説を検証するための「実験」です。ではこの場合どのような仮説が証明されたのでしょうか？

オホーツク海南半にあたる北海道・千島列島沿岸には、日本の古代、およそ5世紀から10世紀の間、海洋民のオホーツク文化が展開し、その南側には後のアイヌ文化につながる続縄文文化―擦文文化が隣接していました(図)。オホーツク文化に関する研究は、道東地方では東京大学が常呂町に実習施設を設けて継続的に進

め、筑波大学(東京教育大学)は根室地域を中心にこなってきました。北海道大学では、戦前・戦中の医学部によるモヨロ貝塚遺跡調査後の空白をおいて、60年代後半から北方文化研究施設が本格的に研究を開始しました。そこでまず力をいれた点は広くこの文化の概要をつかむことで、そのためにオホーツク文化遺跡の綿密な分布調査を全道的に展開し、さらに測量調査もおこないました。これによってこの文化の分布範囲と地方的な特徴を把握することができました。なかでも特に注目された点は、枝幸町ではオホーツク文化の道北的要素と道東的要素の双方がみられることです。

この現象について大井教授は、前期にサハリンから道北地方に進出したオホーツク文化は、中期には道東地方にまで範囲を拡大して発展・変容を遂げて後期を迎え、増加した人口の一部を目梨泊に分村する形で対応したと言う理解・仮説を提示しました。まさに1968年の目梨泊遺跡1号竪穴住居址の発掘調査では、この住居が後期・道東系集団のものであること、つまりその集団の北限の集落であることが実証されました。

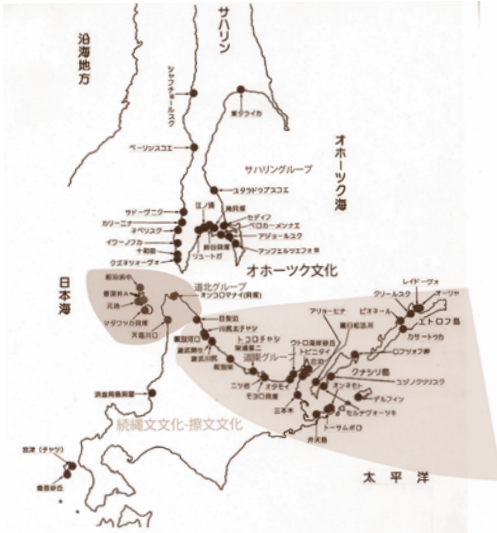
しかし続く発掘調査ではまた新たな、想定外の事実も確認されました。たとえば3号竪穴住居址は後期ではなく中期に遡るものであること、また4号竪穴住居址には50頭に及ぶ大量のヒグマの頭骨が祀られていることなどです。さらに枝幸町教育委員会(佐藤隆広氏、高畠孝宗氏)が進めてきた

一連の発掘調査では、後期の竪穴住居址例に加えて、刀剣類(主に本州産)の副葬された墓が多数みつかりました。

これらの特徴をもつことが明らかになった目梨泊遺跡について、高畠孝宗氏(オホーツクミュージアムえさし館長)や熊木俊朗氏(東京大学教授)は、道東地方の常呂・モヨロ貝塚遺跡などと双璧をなす「拠点集落」と位置付ける見解を提示しました。

筆者は加えて、オホーツク文化に一般的な主要河川の河口部砂丘上ではなく、急峻な海岸段丘上のこの集落立地に防御的な性格を認めとりわけ重視します。日本古代国家による東北地方経営の北進にともなって、オホーツク文化は鉄鋼製品など必需品を手に入れることが容易になり、その対価にヒグマなどの特産品をあてました。従来の北回りサハリン・アムール川系の交易ルートからのこの転換は、大陸・サハリン諸集団との間にある種の「緊張」を生み出したに違いないからです。

遺跡は歴史資料なので「発掘調査は破壊」は大井教授の名言であり、発掘調査報告書の刊行と調査資料の整備・保管・公開は調査に参加した者の使命・責務だと考えます。現在も『北海道大学総合博物館研究報告』として「オホーツク文化の研究6目梨泊遺跡(3)」刊行の準備をすすめています。この報告をより充実した内容にするためには、北見山地の地質・岩石・鉱物、植生、ヒグマや猛禽類他の動物・昆虫の生態、海洋の生態系、気候変動などの共同調査研究を北海道大学総合博物館が主導・推進することが望まれます。



オホーツク文化の遺跡分布

非公開標本デジタルデータベース・みんなの博物館

世界中のほとんどの博物館において、展示室で展示・公開されている標本・資料は収蔵されているモノのごく一部です。例えば北海道大学総合博物館には、種の名前を決める際に利用された約13,000点の「タイプ標本」など、約300万点の標本・資料が収蔵されています。現在、常設展示室で展示・公開されている標本はその0.01%にも達しません。これらの貴重な標本はそれぞれの学問分野においては世界的に広く認識されており、利活用されているものの、各分野の研究者以外の人の目に触れることはほとんどありません。

このたび当館では、北海道立北方民族博物館、むかわ町穂別博物館、札幌市博物館活動センター、札幌市円山動物園、群馬県立自然史博物館、そして北九州市立自然史・歴史博物館と連携して、普段は収蔵庫に大切にしまわれているタイプ標本などの「非公開標本」が収められたバーチャル・ミュージアムの公開を開始しました。その名は非公開標本デジタルデータベース「みんなの博物館」(<https://minna-museum.jp/>)です。

「みんなの博物館」の特徴は分野横断型・館種横断型のデータベースであることです。当館と連携各館の所蔵標本を網羅することを視野に、現生生物(セキツイ動物、無セキツイ動物、植物、菌類・細菌類を含む)、古生物・化石(セキツ

ィ動物、無セキツイ動物、植物、菌類・細菌類を含む)、岩石・鉱物(岩石、鉱物を含む)、考古(人工遺物、自然遺物を含む)、民族(暮らし・道具、美術・音楽・工芸、遺物・資料を含む)の標本・資料が登録されています。当館のオホーツク文化の骨偶やマツカワ(魚類)、群馬県立自然史博物館のアンフィコティルス(ワニ類)の頭骨やトリケラトプスの全身骨格、北九州市立自然史・歴史博物館のウマとそれに騎乗したヒトの全身骨格、むかわ町穂別博物館のカムイサウルス(恐竜)の上顎骨、北海道立北方民族博物館のナーナイの木製食器や*Pyrola grandiflora*(ツツジ科・植物)の標本、札幌市円山動物園のアジアゾウの全身骨格、そして札幌市博物館活動センターのゴマダラチョウを一度にお楽しみいた



「みんなの博物館」のトップページ



「みんなの博物館」の紹介動画

だけです。お好みの標本・資料を検索して、3Dデータや写真を観察してみてください。また、「MY標本」機能を利用すれば、皆さんのお気に入りの「お宝」を集めた博物館をつくることもできます。YouTubeに「みんなの博物館」のPR動画もアップしてあります(<https://www.youtube.com/watch?v=79-f274zj28>)ので、こちらもご覧いただければ幸いです。

なお、「みんなの博物館」は令和5年度の文化庁・Innovate MUSEUM事業に採択された「多館種連携による非公開資料のデジタル化とオンライン公開による博物館展示機能のDX推進業務」事業の助成を受けて作成されました。

江田真毅

(研究部教授／動物考古学)



「みんなの博物館」に登録されているデータの一例

プレスリリース

モンゴルで発見された鳥のように眠る新種の恐竜



鳥のように眠るヤキュリニクス・ヤルウイ。©山本聖士

2016年8月、北海道大学とモンゴル古生物・地質研究機関が共同で行った調査で、モンゴル・ゴビ砂漠南西部のネメグト地域の約7000万年前（白亜紀後期）の地層から、これまでで最も保存状態の優れた進化型のアルバレッツサウルス類の全身骨格の化石が発見されました。この全身骨格は、多くの骨格要素が関節して保存されているため、急速に堆積物で埋没したと考えられ、生態時の姿勢を示している可能性があります。

そして、北海道大学大学院理学院の久保孝太氏、北海道大学総合博物館の小林快次教授、米国・ノースカロライナ大学のツクトバトル・チンゾリッグ博士、モンゴル古生物・地質研究機関のヒシグジャウ・ツクトバトル博士らの研究グループは、2023年11月16日（木）、PLOS ONE誌にこの恐竜に関する論文をオンラインで公開しました。

アルバレッツサウルス類の恐竜は、獣脚類マニラプトル類のグループであり、進化型のものは一本指しかない非常に短い前肢と鳥のような特徴を多く備えた奇妙なグループです。これまでの世界での化石記録は非常に断片的であり、系統関係や生態復元に必要な解剖学的情報が限ら

れていました。

私たちの比較研究により、この恐竜が他のアルバレッツサウルス類には見られない固有の特徴を持つことが明らかになり、新属新種として「ヤキュリニクス・ヤルウイ (*Jaculinykus yaruui*)」と命名しました。属名の"Jaculus"はギリシャ神話に登場する小さな竜の名前に由来し、"onykus"はラテン語で「爪」を意味します。種小名の"yaruui"はモンゴル語で「素早い」を意味し、したがって学名は「素早く小さな竜の爪」という意味を持ちます。

系統解析の結果、ヤキュリニクスは進化型のアルバレッツサウルス類（パルヴィカーソル亜科）に属していることが判明しました。進化型のアルバレッツサウルス類は湿潤な環境によく適応し、モンゴル・ネメグト盆地では多様な仲間が生息していたことが示唆されます。また、ヤキュリニクスの手骨格は良好な保存状態であり、太い第1指と非常に縮小した第2指のみからなります。これはアルバレッツサウルス類でのみ見られる手指の特殊化における中間的な状態を示しています。

さらに、ヤキュリニクスは頭部を体に埋め、長い首や尻尾が体を包み、座るように後肢を畳ん

だ状態で保存されており、現在の鳥類が眠るときに見せる休息姿勢に非常に類似しています。鳥類の見せるこの行動は自らの体温を逃さないようにするための体温調節戦略と考えられており、化石記録では比較的鳥類に近縁な獣脚類トロオドン類メイ (*Mei*) などごく少数の化石でしか確認されていません。アルバレッツサウルス類のヤキュリニクスは、トロオドン類よりもはるか以前に分岐した原始的なマニラプトル類に属しており、これまで考えられているよりも鳥類の休眠行動の起源が古い可能性を示しています。

今回報告されたヤキュリニクスは、同グループの詳細な解剖学的情報を提供すると同時に、鳥類のような特性や行動が、鳥類に分岐する以前の恐竜類の間で広く分布・進化していたことを示唆しています。これは、恐竜から鳥類への進化過程やその背景を理解する上で重要な発見だったのです。

久保孝太

（理学院博士課程）

小林快次

（研究部教授／古生物学）

プレスリリース

織田信長の薬草園の謎：伊吹山の希少植物イブキノエンドウは日本の在来種である

イブキノエンドウ *Vicia sepium* L. は、国内では伊吹山と北海道のみに自生するマメ科の多年草で、これまでは人為的に国内に持ち込まれた植物と考えられてきました。岐阜県立森林文化アカデミーの玉木一郎博士（現岐阜大学）と滋賀県立大学の原田英美子博士が研究を主導した筆者が含まれる研究グループは、DNA解析をもとに、本種が海外から持ち込まれた外来種でなく、最終氷期以前から国内に自生していた植物であったことをつきとめました。



写真1. 夕張川河川敷のイブキノエンドウ (2019年6月15日撮影)

詳しい研究内容についてはプレスリリース (https://www.hokudai.ac.jp/news/pdf/231205_pr.pdf) をご覧いただくこととして、ここでは北海道産のイブキノエンドウについて簡単に紹介します。札幌近郊で最も簡単にイブキノエンドウが見られる場所は、南幌町から長沼町にかけての夕張川河川敷です（写真1）。造成された河川敷に外来種がよく見られること、周囲にムラサキウマゴヤシなどの外来種が多く見られること、河川敷一面に本種が群生することなどから、これまで外来種として認識されてきました。筆者も、現地を訪れた際は外来種であることを全く疑いませんでした。その一方で、19世紀後半に札幌で採集された本種の標本が当館陸上植物標本庫 (SAPS) にあることは、不思議でした（写真2）。北海道で近年侵入した外来種であれば、古い標本があることは稀です。とはいえ、ハリエンジュのように古い外来種の標本があることもありますので、外来種という認識を覆すほどではありませんでした。

玉木博士・原田博士から本種が古くから国内に分布していた在来種であるという解析結果を聞いたときは、驚きました。解析結果には納得し



写真2
1894年6月上旬に幌向鉄道周辺で採集されたイブキノエンドウの標本 (*H. Nagaya s.n.*, SAPS066753)

ましたが、イブキノエンドウがなぜ外来種のように夕張川で繁茂しているのか、謎は深まりました。今後、道内の他の場所での採集や目撃例が増えれば、この謎がとけていくかも考えています。

首藤光太郎

（研究部助教／植物体系学）

首藤光太郎助教が第23回日本植物分類学会奨励賞を受賞

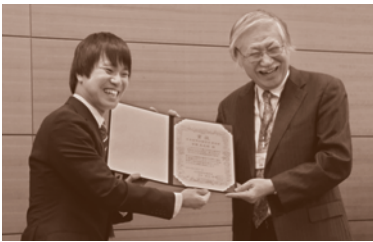


写真1. 日本植物学会会長の村上哲明先生より賞状をいただく時の様子 (2024年3月11日)

3月8日から12日にかけて東北大学片平キャンパスで開催された日本植物分類学会第23回大会で、日本植物分類学会奨励賞をいただくことができました（写真1）。イチヤクソウ属植物に見られる菌従属栄養性の進化や水生植物の分類学などの植物進化学や植物分類学分野における研究業績と、北海道や東北地方を中心とした地域の植物相に関する研究業績が評価されました。特に後者は北海道総合博物館に着任後積極的に取り組んできたテーマであり、この点

が評価されたことは大変光栄です。ボランティアをはじめとした総合博物館スタッフの皆様のご助力によって日頃から自由に研究を続けることができ、そのおかげで今回受賞できたこと、痛感しております。関係する皆様には心より御礼申し上げます。

受賞講演（3月11日、写真2）では、大学院生から現在までに取り組んだイチヤクソウ属の進化に関する研究、ポスドク時代に取り組んだ青森県つがる市の湖沼での水生植物相の研究、



写真2. 受賞講演の様子 (2024年3月11日)

北海道に異動した後の北海道の植物に関する分類の研究について、3つのセッションにわけて講演しました。せっかくの機会でしたのでスタッフの皆様にも聞いていただきたいと思い、3月18日に開催された当館の令和5年度年次活動報告会でも、研究部からの研究報告としてほぼ同じ内容のスライドで講演をさせていただきました。どちらの講演も滞りなく終えることができましたが、研究紹介を詰め込んだ結果、時間の都合から当初作っていたウケ狙いのスライドをほとんど削らざるを得なくなったのが、少し心残りです。

多くの博物館等施設が日頃から取り組んでいる地域的な植物相研究は、残念ながら現代の科学分野ではあまり評価されません。それにも関わらず、積極的に評価していただいた日本植物分類学会には、深く感謝申し上げます。

首藤光太郎

（研究部助教／植物体系学）

プレスリリース

新発見！ティラノサウルス科の胃に残された獲物が明らかに！



シチベスの幼体を捕食するゴルゴサウルスの幼体(画：Julius Csotonyi, © Royal Tyrrell Museum of Palaeontology)

ティラノサウルス科は、白亜紀後期の後半(約8000万～6600万年前)に北米やアジアで陸上生態系の頂点に立つ、史上最大級の肉食恐竜です。孵化したばかりの頃は全長1メートル程度と推定されますが、成体になると全長9～12メートル、体重2～6トンにも達しました。この成長に伴い、彼らの体つきも変化し、ほっそりとした後肢からがっしりとしたものになりました。また、長いナイフ状の歯から太く頑丈なものへと歯や頭部も変化しました。このような形態・サイズの変化は、彼らが成長するにつれて捕食対象が変化し、生態的地位が上位へと移行したことを示しています。成体では大型の植物食恐竜であるトリケラトプスなどを捕食した証拠が見つっていますが、幼体の食性に関する直接的な証拠はまだ見つかっていませんでした。

しかし、私たちの研究で、ティラノサウルス科の幼体は何を食べていたかが分かる証拠が見つかりました。カナダ、アルバータ州南部の地層から発見されたゴルゴサウルスというティラノサウルス科の幼体の化石を調査したところ、腹の中に小型恐竜の痕跡が見つかりました。これは世界初

の発見で、ティラノサウルス科の幼体がどんな食事をしていたかを示す重要な証拠だったのです。

発見されたゴルゴサウルスは、体重が335キログラムと推定され、成体の13%ほどしかありませんでした。死亡時の年齢は5～7歳ほどと考えられます。一方、腹の中に残された2体の恐竜は、カエグナトゥス科シチベスという小型の獣脚類恐竜でした。どちらも1歳になる前の幼体で、腹の中での位置や胃酸による消化の度合いから、別々の時期に捕食されたとみられました。

この研究から、ゴルゴサウルスの幼体が特定の恐竜の幼体を好んで食べていたことが分かりました。特に、肉付きの良い後肢を選んでいたことが注目されます。これは、現代の動物でも見られる行動です。小型恐竜は多く存在し、捕食時のリスクも比較的低いため、幼体にとって食べやすい獲物だったと考えられます。一方、成体は大型の植物食恐竜を捕食することが効率的でした。したがって、幼体と成体では食事の選択が異なっていた可能性があります。この研究の結果は、ティラノサウルス科が成長するにつれて、食

性や生態的地位が変化したことを示唆しています。

今回私たちの研究で得られたティラノサウルス科の食性は、1つの化石の情報に基づいていますが、幼体の食事について初めての具体的な証拠です。この情報は、私たちの考えを確かめるために非常に重要です。また、この研究は、生態系内の様々な生物同士の関係についても重要な示唆を与えます。例えば、ゴルゴサウルスの生態系では、成体と幼体異なる食べ物を好んでいたかもしれません。しかし、同時に、幼体と同じくらいの大きさの別の小型の肉食恐竜と競合していた可能性があります。今後の研究では、異なる地域や時代で、肉食恐竜同士の競争や共存について詳しく調べる必要があります。これによって、恐竜時代の生態系の変化をより深く理解できるでしょう。

田中康平
(筑波大学助教・北海道大学総合博物館資料部研究員)

小林快次
(研究部教授／古生物学)

北海道内合同展示 推し花の押し花 ～牧野富太郎と植物標本～

●2023年7月24日～12月24日

この展示は、2023年に放映されたNHK連続テレビ小説「らんまん」の主人公のモデルとなった牧野富太郎を紹介するために、釧路市立博物館の加藤ゆき恵学芸員の発案で企画されました。道内の博物館等施設に勤務する植物担

当学芸職員が、自身が採集・作成した中で特に気に入っている植物標本を「推し花」として選び、それぞれの館で牧野富太郎や他館紹介のための共通パネルとともに展示しました。展示を実施した施設は、当館と釧路市立博物館のほか、浦幌町立博物館、美幌博物館、北海道博物館、札幌市博物館活動センターの5館です。

当館では、常設展示3階「生物標本の世界」の一角で、展示ケース1台を使い展示を行いました。展示した標本は、筆者の「推し花」である茨戸川産のゴハリマツモと、陸上植物標本庫(SAPS)に収蔵されている牧野富太郎が1923年に東京都小岩で

採集したユウガギクです(写真)。前者は、本種の北海道新産を報告した際の証拠標本です。この標本は結実期のもので、厳密に言えば「推し花」ではなかったため、キャプション上の「花」の文字を消して横に「実」の文字を補って展示しました。展示期間は、7月27日から12月24日となりました。来場者の反応は調べていませんが、展示期間中は多くの来館者が立ち止まって展示をご覧になられていたそうです。

道内の植物担当学芸員が連携して1つの展示企画を開催できたことは、大きな成果といえます。今後も、同様の企画があれば積極的に参加していきたいと思います。この企画の詳細は、2024年4月に出版された北海道博物館研究紀要9号に掲載されています。また、それぞれの推し花を紹介した普及用の冊子も作成しました。後者はまだ残部数がありますので、必要な方は筆者までご連絡いただければ大変幸いです。

首藤光太郎
(研究部助教／植物体系学)



展示の様子(2024年12月24日)

写真展「恋するシマエナガ」ー愛すべき7グラムー

●2023年10月8日～12月24日

北大総合博物館では、道内で活躍する野生生物や自然環境を被写体とする写真家の方々に展示会を開催していただき、北海道の魅力を伝えるとともに道内の貴重な自然環境の保全への活動の動機付けとなる機会を設けさせてもらっています。

令和5年10月8日(日)～12月24日(日)まで、総合博物館1階 企画展示室において本写真展が開催されました。

北海道内において、注目度の高い野鳥、シマエナガを様々な切口で紹介することにより、より多くの来館者の方に北海道の野生生物とその



写真展会場

背景となる自然環境に関心を持ってもらうことを目的とした写真展です。写真家 山本光一氏の写真展は今回が2回目になりますが、山本氏ご自身の強い希望と道内でシマエナガの人気のことから今回の開催となりました。シマエナガの写真集「まるごとしまえなが」(山本光一著)もちょうど令和4年9月に北海道新聞社より出版され、その掲載作品も26点展示されました。また

山本氏が所蔵する「シマエナガの巣」「シマエナガのはく製」などの資料も会場に並びました。

開催期間中、以下の講演会と3D模型への絵付けワークショップも開催されました。

- ◎関連講演会：
- (1)令和5年11月18日・19日
北海道大学総合博物館 知の交流ホール
「野鳥界のアイドル シマエナガの秘密と魅力～人が範とすべき素晴らしい生態～」
山本光一(自然写真家)
 - (2)令和5年12月16日
北海道大学総合博物館 知の交流ホール
「札幌博物館の鳥類標本コレクション」
加藤 克(北海道大学 FSC植物園 准教授)
- ◎関連ワークショップ：
- 令和5年11月18日・19日
北海道大学総合博物館 3階N324
3D模型への絵付け作業
参加者：60名

入場者数：48,319名

大原昌宏
(研究部教授／昆虫体系学)

小さなちいさな哺乳類 トガリネズミ展 ―他の小型哺乳類とくらべてみよう

●2023年12月12日～12月24日

トガリネズミ展が恒例企画となってから2回目、臨時企画の時代から数えても7回目となり市民にもこの企画の存在が定着してきた感があります。今年は北海道に生息するすべてのトガリネズミ(チビトガリ、ヒメトガリ、エゾトガリ、オオアシトガリ)の生体展示ができました。今回も東海大学札幌キャンパスと北大低温科学研究所に後援、円山動物園と野生生物生息域外保全センターに協力をしていただきました。生体展示した個体は後2者で飼育している個体を貸与してもらいました。

生体展示の他に、東海大学(河合久仁子研究室)の研究と円山動物園の飼育に関するポスター展示をしました。昨年はトガリネズミ類やモグラ類の全身骨格の展示を行ないましたが、今回はそれらに加えてエゾモモンガやネズミ類、エゾナキウサギなどの小型哺乳類の全身骨格や剥製なども展示して、トガリネズミとの比較ができるようにしました。またこの企画はCoSTEPの運営するウェブマガジンの「いいね！Hokudai」に取り上げられました。

2023年9月には、トガリネズミ展示企画に携わってきた大館がトガリネズミ類の研究に対して日本哺乳類学会の学会賞を授与されました。これに関連して、企画最終日の12月24日には知の交流ホールにて、大館がトガリネズミを含む真無盲腸類の生態と進化について、そして東海大学の河合教授が繁殖と音声の研究についての講演会を行い、多くの市民に参加していただきました。

今回は展示期間が短かったですが、今までで最多の14名の北大の学部・大学院生に飼育ボランティアやSNS(X)の管理をしてもらいました。彼らの中にはかつてこの企画を見たことがあり、ぜひボランティアとして参加したいと名乗りを上げてくれた人が何人かいました。この企画が一般市民だけ

でなく学内教育の一環としても機能していることは、企画者の一人として望外の喜びでした。

大館智志
(資料部研究員・低温科学研究所助教)



飼育ボランティアが世話をしている中、トガリネズミを間近で観察するビジター。

怪物ヒグマOSO18の顛末展

●2023年12月20日～2024年2月18日

2023年12月20日(水)～2024年2月18日(日)の61日間にわたって、総合博物館1階ラウンジにおいて、企画展示「怪物ヒグマOSO18の顛末展」(北海道大学総合博物館主催、NHK札幌放送局協力)を開催しました。2019年7月に最初の牛が襲われて以来、5年間で66頭を襲い、32頭を殺したヒグマが、遂に2023年7月31日に釧路町で捕殺されました。このヒグマ、最初に牛の被害が出た場所(オソツベツ)とその時に計測された足跡の幅が18cm(大型のオスのサイズ)だったことに因み、コードネーム“OSO18”と名付けられました。近年、デントコーンなどの農作物を荒らすことはあっても牛などの家畜を襲うことはごく稀で、この個体のように5年間にわたって牛を襲い続けたヒグマはとても珍しいものです。さらに、このヒグマは牛を襲いつつも、ほとんど姿を見せないことから別称“忍者グマ”とも呼ばれ、人の目を忍んで被害を出し続けたのでした。そこで、このヒグマの習性や移動パターンをハンターらの推察や追跡などを交えて、

2回にわたってNHKの特集番組(NHKスペシャル)で放映されました。今回、この番組を制作された山森英輔ディレクター(NHK札幌放送局)の協力を得て、OSO18ヒグマの企画展示に至りました。別のディレクターが回収したOSO18ヒグマの骨盤、腰椎、尾椎、上腕骨を、総合博物館にて江田真毅教授監修の下で骨格標本にしていただきました。この骨格標本を展示することをベースにして、OSO18が捕殺されるに至った顛

末を、NHKの特集番組(NHKスペシャル)で使った画像等をパネルにして紹介しました。展示期間中の入館者数は21,306名で、多くの方にOSO18と呼ばれた怪物ヒグマに思いを馳せる機会を提供することができました。

坪田敏男
(総合博物館長・獣医学研究院教授／野生動物医学)



OSO18の骨盤、腰椎、尾椎、上腕骨(展示ケース内)



展示を見る来館者

縄文遺跡 キウス周堤墓群 パネル展

●2024年2月24日～5月6日

北大総合博物館では、2012年から「バイOMETEIX市民セミナー」をすでに100回以上開催をしています。

令和6年度は、公立千歳科学技術大学オープンサイエンスパークとの共同開催として、特別シリーズ「地域学：歴史に学び風土が拓く、持続可能な未来～古代史から学ぶ持続可能な地域の未来～」をテーマに一連の講演セミナーを開催しました。

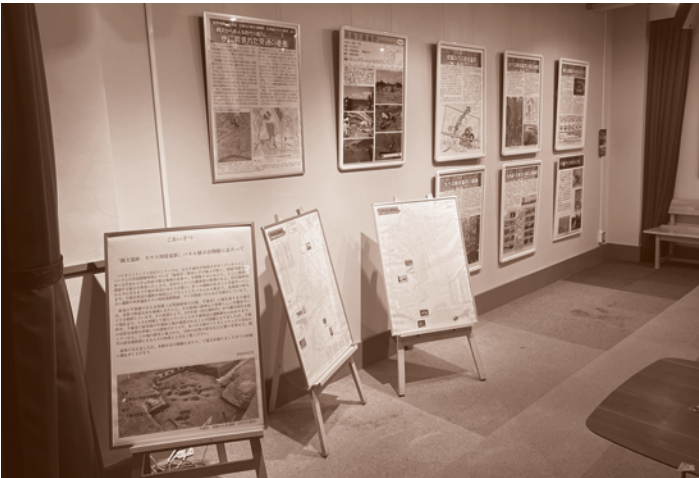
令和6年3月2日(土)には、「地域学：歴史に学び風土が拓く、持続可能な未来」についてのセミナーが開催されました。このセミナーに関連する展示として、令和6年2月24日(土)から5月6日(日)まで、総合博物館1階 知の交差点N127室南側壁にて「縄文遺跡 キウス周堤墓群 パネル展」を開催しました。

展示内容は、千歳市周辺の遺跡を地図上にプロットしたパネルから始まり、北海道で最も古い遺跡やキウス周堤墓群関連、アイヌ関連パネルなどの10点になります。縄文時代の遺跡であるキウス周堤墓群に注目し、北海道の気候・生

態系のなかで自然との共生を可能とした縄文人の営みを垣間見ることで、今、私たちが問われている循環型経済への取り組みや、寒冷地における危機管理への取り組みに対して、どのような示唆があるのか、そして持続可能な北海道の未来について考える機会としました。

知の交差点は来館者が飲食しながら休憩ができるスペースです。休憩のついでに、このパネル展をじっくりと見ている来館者が多くおられました。

大原昌宏
(研究部教授／昆虫体系学)



パネル展会場

2023年度前期
ミュージアムマイスター認定式

総合博物館では、本学が目指す全人教育の一端を担う教育プログラム「ミュージアムマイスター認定コース」を2009年度より展開しています。2023年度前期に、理学部地球惑星科学科3年 荒川大地さん、工学部応用理工系学科4年 柿澤彩花さんの2名が新たに認定されました。2名の認定により、これまでにミュージアムマイスターに認定された学生は55名となりました。

12月8日に、ミュージアムマイスター認定式が執り行われ、坪田敏男館長より認定証が授与されました。認定式では坪田館長がミュージアムマイスターの意義を述べられ、その後、認定された2名にコースで学んだことの振り返りや学習の過程で身につけたことについて語っていただきました。「ミュージアムマイスターに認定されて志を新たにできたので、非常に良かったと思います。卒論ポスター発表会の運営などコースで学んだ経験をこれから活かしたいと思います。」「美術館や博物館がすごく好きだったので、ミュージアムマイスターコースに臨みました。卒業

後は新しい生活をするので、展示解説などコースで得た経験と知識を別の場所でも活かして、もっと博物館などに足を運びたいと思います。」と晴れやかに語る姿が印象的でした。マイスターコースで学んだ経験を活かし、これからもご

活躍されることを期待しております。

土田江里子
(研究支援推進員)



左から荒川さん、館長、柿澤さん

マイスターコースについての詳細は、総合博物館のウェブサイトをご覧ください。
<https://www.museum.hokudai.ac.jp/education/museummeister/>

卒論ポスター発表会

●2024年3月2日・3日



多くの来場者に説明して対話する発表者達

北海道大学の学部4年生が卒業研究を1枚のポスターにまとめ、来場者にわかりやすく発表して質問に受け答える「卒論ポスター発表会」を、3月上旬の週末2日間に館内2会場で開催しました。今年度で16回目となるこの取り組みは、当館が北大の全人教育の一環として展開しているミュージアムマイスター認定コースの社会体験型科目に位置づけており、コミュニケーション能力の涵養や異分野への関心の喚起、大学博物館への理解を深めることを目的としています。

発表には農学部と理学部、工学部、文学部から11名が参加しました。1枚のポスターを完成させるまでに、3回の中間発表会に参加して、内容やデザインに関して当館の担当教員の指導を受けたり、他の発表者や発表会運営担当学生とのディスカッションを重ね、そこで得た意見を参考にして改訂を続けました。さらにさまざまな来場者を想定した説明のリハーサルを重ねて準備しました。発表会当日は、来場者との対話を楽しみながら解説していました。

発表会の運営は理学部と農学院、理学院、文学院の5名の学部生と大学院生が担当し、学内・学外に向けてアピールする2種類の印象的なポスターと、発表者の研究のポイントやプロフィール、博物館の見どころなどを掲載した内容・デザインともに充実したプログラムを制作し

た他、発表会当日は受付や司会を務めました。今年度は発表件数が多いことから2会場での開催となりましたが、メンバーが臨機応変に対応し、スムーズな運営を実現できました。

発表会の最後には、市民5名と本学教員5名から成る審査員の評価による「最優秀賞」とSDGsへの貢献の可能性を評価する「SDGs賞」、5名のミュージアムマイスターの合議による「ミュージアムマイスター賞」、2日間の来館者の投票による「来館者賞」の表彰式と講評会を行いました。「最優秀賞」は工学部の木元友理香さんと農学部の石川弘晃さんが、「SDGs賞」は前述の石川さん、「ミュージアムマイスター賞」は前述の木元さん、「来館者賞」は理学部の杉浦寛大さんが受賞しました。

来場者には、さまざまな学部の4年生の研究成果を知っていただく機会となりました。発表者と運営担当学生の事後考察レポートには、コミュニケーション能力を身に付ける機会になっただけでなく、卒業研究を見直したり、他分野の学生の研究を知ったり、来場者から有意義なご意見をいただく貴重な機会となったことや、発表会の運営をグループで担った達成感や課題などが綴られています。レポートや当日の様子は当館ホームページで公開しています。

◎発表者：

- 木元友理香**(工学部)
「細菌を使った鉱山廃水からの金属回収プロセス」
- 伊藤貴洋**(工学部)
「中川町・当麻町・道南地方にみる建築用地域産木材の流通」
- 三上凌平**(工学部)
「北海道の現代住宅にみる内と外のつながりかた」
- 菅原咲紀**(工学部)
「小樽市における戦前期の歴史的建造物について」
- 上野怜也**(工学部)
「建物配置と地割からみる北越殖民社による野幌開拓計画の特徴」
- 菅遥斗**(理学部)
「鳥の骨の個性はどこから？－骨組織と生態の関連を探る－」
- 杉浦寛大**(理学部)
「AI が化石を見つける？ ～未知の化石の発見に挑む！世界初のアプローチ～」
- 祖父江陽介**(理学部)
「背骨の形の違いから見るカムイサウルスの生態」
- 荒岡柊二郎**(理学部)
「深海底の形成に迫る ～オマーンオフショアライトより～」

- 石川弘晃**(農学部)
「根室地方湿地群の植物相」
- 幸一尋**(文学部)
「英語の形容詞＋過去分詞型複合形容詞の形成条件―結果構文との関連に着目して―」

◎運営担当学生：

来田祐太郎・藤木卓巳(農学院博士1年)、佐藤英(理学部2年)、長峰実央(理学院修士2年)、三田尾有希子(文学院修士1年)

◎教職員審査員：

坪田敏男(総合博物館 館長・大学院獣医学研究院 教授)・内田努(大学院工学研究院 准教授)・高橋英樹(名誉教授・総合博物館 資料部研究員)・出村誠(先端生命科学研究院 /生命科学科 / 理学部 教授)・山内彩加林(低温科学研究所 助教)

◎市民審査員：

浅野目祥子(NPO法人手と手 代表理事)・中道洋友(北海道札幌啓成高等学校 教諭)・蛭川隆介(北海道新聞社 論説主幹)・藤田良治(愛知淑徳大学 准教授)・矢野ひろ(NPO法人北海道遺産協議会 理事)

◎ミュージアムマイスター審査員：

太田晶(むかわ町経済恐竜ワールド戦略室)・押野祐大(北海道中標津高等学校 教諭)・大藪隼平(理学院博士2年)・佐々木悠貴(工学院修士1年)・荒川大地(理学部3年)

◎担当教職員：

北野一平・小林快次・湯浅万紀子・市来紗都子・土田江里子

湯浅万紀子

(研究部教授／博物館教育学)

ウィリアム・ペン・ブルックス博士の玄孫ジェームス N. スミス氏が来館

●2023年11月2日

クラーク博士の後任として札幌農学校の基礎を築いた、ウィリアム・ペン・ブルックス博士の玄孫のジェームス N. スミス氏が11月2日、北海道大学を訪れました。

スミス氏は大学事務局で資金清博総長を訪問後、構内を巡り札幌農学校第2農場、総合博物館に立寄りました。

第2農場では近藤誠司名誉教授、総合博物館では大原昌宏教授よりブルックス博士にまつわる説明を受け、ご自身が建築家であることから建物に興味を抱かれ、質問を交えながら熱心な様子で展示や建物をご覧になりました。

山田久恵

(事務部主任)



第2農場で近藤名誉教授の説明を受けるスミス氏



総合博物館でブルックス博士のパネルを撮影するスミス氏

SDGsデー2023開催

●2023年11月3日

北海道大学×STV SDGsデー2023が開催されました。

午前のオープニングイベントでは小林快次教授が「最新恐竜研究2023」と題して講演を行いました。約1,500人の応募の中から抽選で選ばれた子供と保護者など約300人が聴講する中、2023年にアラスカ、モンゴル、ウズベキスタンで実施した発掘調査について報告するとともに、発掘調査中に感じた地球の気候変動として、アラスカで氷河が年々小さくなっていることや、モンゴルで湖が消滅していることなどから、人間が絶滅した恐竜のようにならないよう、地球の環

境に対して一人一人ができることを考えようと伝えました。

午後には恐竜、遺跡、岩石・鉱物、植物をテーマとした4つのワークショップが行われ、約120人が参加しました。参加者は普段手にすることができない本物の化石や貴重なレプリカに触れたり、札幌キャンパス内の樹木を観察したりしながら、担当教員から専門的な講義を聞きました。また、1日を通して、総合博物館の10種類の収蔵品が描かれたカードを、謎解きをしながら探す探検カードラリーを実施し、約500人の方が参加するとともに、館内のカフェ「ぼらす」では、

恐竜にちなんだ限定メニューが提供され、気候変動や持続可能性について、楽しく学び・体験するイベントになりました。

日時：2023年11月3日(金・祝)9:30～17:00

◎オープニングイベント(会場：学術交流会館講堂)
「最新恐竜研究2023」(総合博物館 小林快次 教授)

◎ワークショップ(会場：総合博物館及び構内)
「恐竜の骨を観察しよう！」(総合博物館 小林快次 教授)
「遺跡の骨を分析しよう」(総合博物館 江田真毅 教授)
「観察して感じる岩石・鉱物の役割」(総合博物館 北野一平 助教)
「ガチ観楓会」(総合博物館 首藤光太郎 助教)

◎探検カードラリー(会場：総合博物館1～3階)
制作したカード：「ヤナギタウコギ」、「オニコンブ」、「ヨトウガ」、「光竜鉱山の金鉱石」、「針入れ(アホウドリ類・上腕骨製)」、「CAMUI型ハイブリッドロケット」、「ニッポノサウルス」、「デスモスチルス」、「マチカネワニ」、「タルボサウルス」

※制作カードの監修：小林教授、大原昌宏教授、江田教授、北野助教、首藤助教(総合博物館)、四ツ倉典滋教授(北方生物圏フィールド科学センター)

山田久恵

(事務部主任)



オープニングイベントの様子



「ガチ観楓会」の様子

2023年度旧札幌農学校第2農場のガイド付きツアー

●2023年11月1日～11月3日

あのコロナ禍で、2022年度まで内部公開は中止となっていた旧札幌農学校第2農場も、流行がおさまり始めた2023年5月から公開が再開され、例年通り沢山の市民が訪れるようになった。なお私近藤は2022年から海外での活動が多くなり、第2農場で活動が少なかったが、ボランティアの皆さんが交代で週1～2回は出てきて内部の整理や清掃を行ってくれていた。有り難い限りである。



①

2023年度は久しぶりに第2農場のガイド付きツアーを行うことになり、11月1日から11月3日の3日間、午前1回午後1回のガイド付きツアーを行った。期間中、ボランティアさんに4～8人が毎回ガイドを担当していただき、延べで33人・回の出番となった。参加者は総数で52名(男女26名ずつ)と、以前に開催したツアーより遙かに少な



②

く、また道外からの参加者は8名と大半が道内もしくは市内の方々だった。これは数年間中止していたこともあり、又市民に対する事前の周知がやや足りなかったからであろう。期間中の11月2日には、開学時の札幌農学校米国人教授であるブルックス先生の玄孫である方がご一家で見学に訪れ、ツアーに花を添えた。

近藤誠司

(名誉教授・資料部研究員)

① ツアー前の全体説明(宇井康子撮影)

② 酪農生産施設を説明するボランティアの石田さん(宇井康子撮影)

③ モデルバーン外構を解説するボランティアの稲場さん(宇井康子撮影)

④ モデルバーン2階で解説するボランティアの渡部さん(宇井康子撮影)

⑤ 牧牛舎の解説するボランティアの石川さん(宇井康子撮影)



③



④



⑤

「ポプラチェンバロ×チェロ」ミュージアムコンサート開催

●2024年2月3日

2024年2月3日、知の交流ホールで「ポプラチェンバロ×チェロ」ミュージアムコンサートを開催しました。新妻美紀さん、近 祥伍さん(北大附属図書館)、高橋捺津さん(文学院)、森田 杜(筆者、法科大学院)のチェンバロボランティア4人が出演しました。コンサート当日は朝からあいにくの大雪でしたが、開演直前にはホールの窓から日差しも差し込み、満席の中、無事にコンサートを終えることができました。

チェロは高橋さんと森田が担当し、マルチェッロのチェロソナタ、J・S・バッハのガンバソナタ第2番といったバロックの名曲や、カッチーニのアヴェ・マリア、ジブリ作品である「ハウルの動く城」の映画音楽など幅広い年代の曲を演奏しました。1時間近くあるプログラムにおける、全てのチェンバロ伴奏を新妻美紀さんに担当していただきました。

また、昨年11月に新たにメンバーに加わった、近 祥伍さんにヘンデルの組曲第1集より第1番を演奏していただきました。近さんはボラン

ティアへ所属する以前からチェンバロの演奏経験があり、本番も貫禄のある、素晴らしい演奏でした。

そして、出演者以外のボランティアメンバーにも、整理券の配布など、当日の運営をお手伝いいただきました。この場を借りて、お礼申し上げます。

バロック時代のチェンバロと現代のチェロという組み合わせで演奏がなされる機会はあまり多くありません。新・旧の楽器が持つ特性を融合さ



ヴィヴァルディ作曲「2台のためのチェロ協奏曲」

せ、バロックのみに固執しないプログラムを用意した点において、北大が掲げる「フロンティア精神」に則ったコンサートを開催できたと考えております。

ご来場くださいました皆様、北大博物館関係者の皆様への感謝を忘れず、これからも活動に励んでまいります。

森田 杜

(チェンバロボランティア)



コンサート出演メンバー：左から新妻、近、森田、高橋(敬称略)

宇宙の4Dシアター

●2023年12月16日

2023年12月16日(土)に宇宙の4Dシアターボランティアによるプラネタリウム公演「これであるとも流星博士」が行われました。14時、15時、16時から3回公演し、6つの3択クイズを通して流れ星について楽しく学びながら、スクリーンに投影された宇宙空間を旅しました。まずは、公演日の夜に札幌で見られるであろう星空を眺めながら、見える星々について説明がありました。そし

て、公演日前に話題になっていたふたご座流星群に触れつつ、早速、効果音とともに第1問「流れ星の正体は何？」が出題されました。わかりやすいイラストとともに解答と解説を聞いて、来場者の方々が意外な正体とそのサイズ感に驚いたのは束の間で、流星群と流れ星の違いに関する第2問が出題されました。そして、流星群に星座の名前がつく理由に関する第3問を通して、流れ



公演前の様子

星がどのように地球に到達してわたしたちの目にどのように見えるのかを学びました。第4問では、流れ星の観察方法について紹介され、明るい街中でも夜空を観察しやすくするためのコツを実際にその場で練習しました。さらに、第5問で2024年の流星群情報が出題され、その流星群が見られるであろう未来の札幌での夜空をスクリーンに投影して、日時と方角を予習しました。最後に、第6問「流れ星とほうき星の違いは何？」が出題され、マニアックな解説とともに、ほうき星の故郷を含め宇宙空間を巡りました。来場者の多くは日本人の家族連れの方々や学生さんでしたが、中には外国人観光客の方々の姿もありました。宇宙の4Dシアター公演は目で見て楽しめるコンテンツですが、海外の方向けの説明・対応の方法を検討する必要性を感じました。

北野 一平

(研究部助教／岩石鉱物学)

令和5年度研究・活動報告会

●2024年3月18日

研究・活動報告会は毎年度末に研究部、資料部、学生・院生、ボランティアから発表者を募り、博物館活動について報告する会です。今回は2018年度以来の対面開催となりました。研究部の研究報告は首藤光太郎助教にご担当いただき、ご自身が研究するイチヤクソウなどの植物について、そして植物分類学を志した理由についてユーモアを交えながら語っていただきました。資料部研究員の研究報告では、天野哲也資料部研究員に2024年3月に刊行された目梨泊遺跡の発掘調査についてご報告いただくとともに、私たち研究部教員に対する熱いメッセージもいただきました。学生・院生の代表として登壇された佐々木悠貴さんにはご自身が初回からかかわってきた「建築の学生展」について、展示解説ボランティアグループの笹谷幸恵さんには展示解説ボランティアとしての活動についてご紹介いただきました。

◎式次第

14:00 館長の挨拶 (坪田敏男館長)
14:10 全体報告(江田真毅教授)
14:30 研究部研究報告(首藤光太郎助教)
14:50 資料部長から全体報告(小澤丈夫資料部長)
15:00 資料部研究員研究報告(天野哲也資料部研究員)
15:20 学生・院生研究報告(佐々木悠貴さん)
15:40 ボランティア会長から報告(在田一則ボランティア会長)
15:50 ボランティア活動報告(笹谷幸恵さん)
16:05 ボランティア表彰
16:20 館長から閉会の挨拶(坪田敏男館長)

研究・活動報告会の後には同年度末で異動・退職となった井上猛係長・柴野伸幸技術補助員の送別会を兼ねた懇親会が催されました。研究・活動報告会、そしてその後の懇親会と新型コロナウイルス蔓延の影響によって縮小せざるを得なかった博物館活動が徐々に平常化してきたことを窺えるものとなりました。

江田真毅

(研究部教授／動物考古学)



挨拶をする坪田館長



全体報告を行う江田教授

ボランティア表彰

●2024年3月18日

総合博物館では、活動継続5年、10年の節目を迎えられた方を対象とした表彰式を毎年執り行い、博物館活動に協力いただいたことへの感謝の意をお伝えしています。

現在は総合博物館16分野と水産科学館のボランティアグループが活動しています。

2023年度は、活動継続5年を迎えられた方が8名、10年を迎えられた方が6名いらっしゃり、表彰式には6名の方がお越しくだしました。

表彰式は、活動・研究報告会で行い、坪田敏男館長からおひとりおひとりに直接感謝状が手渡され、当日ご欠席の表彰者の方々には後日感謝状をお送りしました。

今回表彰を受けられた方々を含め、ボランティア活動10年継続者のお名前は博物館3階廊下に掲示しております。ご来館の際に是非ご覧ください。

当館の活動にご協力いただいている事を改めて感謝申し上げます。

山田久恵
(事務部主任)



公開講演会『標本庫知新 植物標本とそのタネの利活用と可能性』

●2024年3月23日

植物標本と、植物標本がもつ種子の活用や可能性をテーマにした公開講演会が、3月23日(土)の13時から15時ごろにかけ1階ホール「知の交流」で開催されました。この公開講演会は、植物標本がもつ種子の発芽可能性を研究する科研費プロジェクトの一環で、そのアウトリーチのために開催されたものです。演者は筆者と、福島大学共生システム理工学類の黒沢高秀教授、新潟大学教育学部の志賀隆准教授の3名です。黒沢教授は筆者の学生時代の指導教員であり、志賀准教授はポスドク時代に所属した研究室のボスです。日頃から共同研究や学会などで顔なじみではありますが、3人で一つの公開

講演会を企画するのは初めてとなりました。

公開講演会では、まず筆者が、「植物標本のオーソドックスな利活用」と題して、植物標本の特徴や植物分類学分野でのこれまでの植物標本の利活用について、現在進めている研究例を交えて解説しました。次に黒沢教授が、「標本を用いてできるコト ～広がるミュゼオミクスの世界～」と題して、植物や動物の標本のDNAや安定同位体を分析して(このような分野がミュゼオミクスと呼ばれます)、その正体や生態を明らかにした様々な研究事例を紹介しました(写真)。続いて志賀准教授が、「生きている植物標本のタネ」と題して、標本庫に収蔵された植物標本の

種子の可能性や、科研費プロジェクトの主な成果となった、種子が生存しやすい分類群や標本の乾燥方法について講演しました。最後に、30分弱の総合討論の時間を設けました。司会は、札幌市博物館活動センターの山崎真実学芸員にお願いしました。

公開講演会には、約40名の参加がありました。総合討論では会場から次々と質問があり、実りのある講演会になったと思います。

首藤光太郎
(研究部助教／植物体系学)



黒沢教授による講演の様子

2023年度
後期記録

令和5年10月から令和6年3月までに行われた
バラタクソニスト養成講座

きのこバラタクソニスト養成講座 (初級)
講師：小林 孝人(北海道大学総合博物館 資料部研究員)
日時：10月21日(土)
定員：10名 対象：中学生以上
参加者：10名

昆虫甲虫バラタクソニスト養成講座(中級)
講師：大原 昌宏(北海道大学総合博物館 教授)・菊地 那樹(北海道大学農学院)・Ian dela Cruz(北海道大学農学院)・下中 淳ノ介(北海道大学農学院)
日時：3月9日(土)～3月10日(日)
定員：10名
対象：小学校4年生以上で昆虫初級修了者
参加者：4名

昆虫甲虫バラタクソニスト養成講座(上級)
講師：大原 昌宏(北海道大学総合博物館 教授)・菊地 那樹(北海道大学農学院)・Ian dela Cruz(北海道大学農学院)・下中 淳ノ介(北海道大学農学院)
日時：3月16日(土)～3月17日(日)
定員：10名
対象：小学校4年生以上で昆虫初級・昆虫甲虫中級修了者
参加者：5名

入館者数(令和5年10月～令和6年3月)

	入館者数	見学 団体数	解説の 件数	企画展示(略称)
10月	24,723	51	休止	写真展「恋するシマエナガ～愛すべき7グラム」(10/8～12/24)
11月	18,804	25	休止	写真展「恋するシマエナガ～愛すべき7グラム」(～12/24) ポプラチェンバロのミュージアムコンサート(11/5)
12月	9,881	10	休止	写真展「恋するシマエナガ～愛すべき7グラム」(～12/24) トガリネズミ展 一他的小型哺乳類とくらべてみよう(～12/24) 4Dシアター『これであなたも流星博士』(12/16) 「怪物ヒグマ OSO18の顛末展」(12/20～2/18)
1月	8,799	10	休止	「怪物ヒグマ OSO18の顛末展」(～2/18)
2月	12,312	2	休止	「怪物ヒグマ OSO18の顛末展」(～2/18) ポプラチェンバロとチェロによるミュージアムコンサート(2/3) 縄文遺跡 キウス周堤墓群 パネル展(～5/6)
3月	13,090	8	休止	縄文遺跡 キウス周堤墓群 パネル展(～5/6) 2023年度卒論ポスター発表会(3/2～3/3) 公開講演会『標本庫知新 植物標本とそのタネの利活用と可能性』(3/23)

令和5年10月から令和6年3月までに行われた
セミナー・シンポジウム

土曜市民セミナー「天然のタイムカプセル：琥珀に眠る太古の昆虫化石について」
山本 周平(北海道大学総合博物館 資料部研究員)
日時：10月7日(土)13:30～15:00
参加者：47名

土曜市民セミナー「北海道の首の短い大型首長竜、プリオサウルス類」
越前谷 宏紀(北海道大学総合博物館 資料部研究員)
日時：11月11日(土)13:30～15:00
参加者：83名

土曜市民セミナー「自然科学で探る縄文文化の年代と食べ物」
國木田 大(北海道大学文学研究院 准教授・総合博物館 資料部研究員)
日時：12月9日(土)13:30～15:00
参加者：70名

【トガリネズミ展】公開セミナー
河合久仁子(東海大学生物学部 教授)
大館 智志(北海道大学低温科学研究所 助教)
日時：12月24日(日)13:30～15:30
参加者：40名

土曜市民セミナー「クマを知りクマに学ぶ」
坪田 敏男(北海道大学総合博物館 館長・獣医学研究院 教授)
日時：1月20日(土)13:30～15:00
参加者：83名

土曜市民セミナー「海浜性甲虫の分類と生態」
大原 昌宏(北海道大学総合博物館 教授)
日時：2月10日(土)13:30～15:00
参加者：48名

土曜市民セミナー「魚に寄生して暮らすウオノエ科甲殻類の多様性」
川西 亮太(北海道教育大学 准教授・北海道大学総合博物館 資料部研究員)
日時：3月9日(土)13:30～15:00
参加者：46名

バイオミメティクス市民セミナー『地域学：歴史に学び風土が拓く、持続可能な未来』～自然史から読み解く生態系サービスと自然共生～

野沢 宏志(こどもART塾)
野村 周平(国立科学博物館)
大原 昌宏(北海道大学総合博物館 教授)
日時：12月9日(土)13:30～15:30
参加者：現地45名およびハイブリッド方式

バイオミメティクス市民セミナー『地域学：歴史に学び風土が拓く、持続可能な未来』～古代史から学ぶ持続可能な地域の未来～

直江 康雄(千歳市埋蔵文化財センター)
本村 信人(リサイクルファクトリー株式会社・キウス周堤墓群を守り活かす会)
曾我 聡起(公立千歳科学技術大学 教授)
日時：3月2日(土)13:30～15:30
参加者：現地45名およびハイブリッド方式

令和5年10月から令和6年3月

10月8日	写真展「恋するシマエナガ～愛すべき7グラム」開催(～12/24)
11月1日	札幌農学校第2農場ガイドツアー開催(～11/3)
11月2日	ウィリアム・ベン・ブルックス博士の玄孫ジェームス N. スミス氏 博物館、第2農場見学
11月5日	ポプラチェンバロのミュージアムコンサート開催
11月18日	写真展「恋するシマエナガ 愛すべき7グラム」関連企画シマエナガ、リアル模型絵づけワークショップ開催(～11/19)
12月12日	トガリネズミ展 一他的小型哺乳類とくらべてみよう(～12/24)
12月16日	4Dシアター『これであなたも流星博士』開催
12月16日	「恋するシマエナガ 愛すべき7グラム」関連講演会開催
12月20日	「怪物ヒグマ OSO18の顛末展」開催(～2/18)
1月26日	国連大学ご一行(3名) 博物館見学
2月1日	文部科学省高等教育局高等教育企画課(3名) 博物館見学
2月3日	ポプラチェンバロとチェロによるミュージアムコンサート開催
2月24日	縄文遺跡 キウス周堤墓群 パネル展(～5/6)
3月2日	2023年度卒論ポスター発表会(～3/3)
3月7日	リトアニア農業副大臣ご一行(11名)博物館見学
3月23日	公開講演会『標本庫知新 植物標本とそのタネの利活用と可能性』開催
3月31日	技術補助員 柴野伸幸さん 退職

お礼

以下の方々に当館ボランティアとして学術標本整理作製・展示準備などで協力いただきました。謹んでお礼申し上げます。(令和5年10月1日～令和6年3月31日)

(敬称略)

●植物標本

井河龍之介, 石川浩晃, 蝦名順子, 大原和広, 奥山修右, 小野波龍, 加藤 恵, 加藤康子, 菊地敦司, 木下愛子, 児玉 諭, 坂上美裕己, 嶋崎太郎, 島田恵実, 田端邦子, 中川博之, 西村南美, 新田紀敏, 萩原法子, 林 裕子, 藤田 玲, 星野フサ, 道川富美子, 目黒嘉子, 矢野ひろ, 山本ひとみ, 横山 耕, 吉中弘介

●菌類標本

石田多香子, 鈴木順子, 谷岡みどり, 外山知子, 星野フサ, 村上さつき

●昆虫標本

梅田邦子, 柏崎 昭, 片倉晴雄, 喜多尾利枝子, 黒田 哲, 紺野鼓太郎, 斉藤光信, 櫻井正俊, 佐々木柊太郎, 澤田昌恭, 志津木真理子, 諏訪正明, 高橋かなみ, 高橋誠一, 津島光大郎, 都筑暖, 問田高宏, 鳥山麻央, 永山 修, 藤田淳一, 古田未央, 村上麻季, 山本文子, 山本そら, 山本ひとみ, LIEW HAI XIANG

●考古学

荒井綺乃, 池田圭吾, 猪沢未来, 今井菜摘, 内田耕平, 宇津城遥平, 太田 晶, 大泰司紀之, 大藪隼平, 奥山杏南, 勝島日向子, 木村則子, 許開軒, 工藤智美, 越崎聖也, 斉藤理恵子, 佐々木征一, 佐藤亜希子, 佐藤桐子, 謝 倩冰, 相馬司, 染矢楓久, 高橋由羽, 多久和隼, 田中望羽, 陳 姿螢, 坪内 和, 土肥加奈子, 中山小夏, 西山貢, 二瓶寿信, 丹羽志萌, 丹羽琢泉, 原山法大, 平山 薫, 外間央椰, 星山葵衣, 堀 隼輔, 前田大智, 矢倉鉄平, 安井優実, 湯村晃尚美, 楊 紫雲,

吉沼利晃, 劉 旻, 渡邊洋子

●メディア

矢野ひろ, 山田大隆, 山本ひとみ

●化石

朝見寿恵, 荒山和子, 市橋晃弥, 糸井容子, 白田みゆき, 大島康生, 太田 晶, 太田久美子, 大村 颯, 大藪隼平, 岡野忠雄, 尾崎美雪, 尾上洋子, 金内寿美, 木村聖子, 木村映陽, 小林将貴, 近藤知子, 櫻井奎志郎, 佐藤健一, 武田満希, 田中望羽, 長瀬のぞみ, 西川香々, 本村美奈子, 前田大智, 矢倉鉄平, 山内静香, 山角美夏, 山下暁子

●北大の歴史展示

西東 淳, 高橋道子, 土井茂子, 藤田正一

●展示解説

在田一則, 池田玲菜, 太田 晶, 生越昭裕, 河本恵子, 西東 淳, 笹谷幸恵, 塚田則生, 對馬 旬, トン タイン ミン, 永岡明美, 西川笙子, 廣瀬由香里, 松田義章, 村上龍子, 山崎敏晴, 山田大隆, 渡部典子

●平成遠友夜学校

柿本恵美, 城下洽子, 須田 力, 高橋道子, 土井茂子, 藤田正一, 牧野小枝子, 増田文子, 山岸博子

●4Dシアター

安部布実子, 石神早希, 岩本歩夢, 王 芸穎, 長田幸子, 加藤啓子, 佐藤淳子, 佐藤 豪, 清水花梨, 田中裕子, 成川航斗, 長谷川健太, 平井由実果, 平田栄夫, 福澄孝博, 増田文子

●ポプラチェンパロ

石川恵子, 石川弘晃, 小野敏史, 近 祥伍, 新林俊哉, 高橋捺津, 新妻美紀, 野村さおり, 松田祥子, 森田 杜

●図書

岡西滋子, 今野成捷, 嶋野月江, 須藤和子, 高木

和恵, 田端邦子, 中井稚佳子, 久末進一, 鮎田久意, 本名百合子, 村上龍子, 山田大隆

●第2農場

石田多香子, 稲場良雄, 宇井康子, 大沼良文, 岡川秀幸, 金子哲郎, 西東 淳, 城下洽子, 花里隆, 藤井利侑, 山田大隆, 渡部典子

●ハンズオン

嶋野月江, 須藤和子, 仲谷優輝, 濱市宗一, 福澄孝博, 山岸博子

●きたみてガーデン

石川弘晃, 浦里拓人, 温 虹, 柿本海琉, 佐藤瞭, 新免友基, 西海航生, 西田藍里

●地学

安部布実子, 在田一則, 浦口弘子, 加藤義典, 黒澤邦彦, 小磯直也, 佐藤淳子, 佐藤 豪, 清水花梨, 高橋政哉, 辻野淳子, 都筑暖, 成川航斗, 新井田清信, 西川香々, 廣瀬由香里, 福澄孝博, 間口久美子, 増田文子, 松田義章, 皆川泰輝, 山崎敏晴

●水産科学館

Lee Jungho, 井黒浩輔, 伊藤和希, 小幡光汰, 北向祐人, 篠原知樹, 園山萌香, 張 逸帆, 二瓶聡, 濱田幸穂, 檜垣健介, 樋口淳也, 古庄 誠, 松本 堅, 山下花梨, 山梨颯太, 横川健太

表紙画像: Julius Csotonyi, ©Royal Tyrrell Museum of Palaeontology